section 2 震災体験手記 その時私は

鳥取県西部地震を振り返って

日野病院　院長　堀江　裕

その時私は

平成12年10月6日、午後零時20分特急【やくも】に乗車し日野へむかっていました。午後1時30分すぎ新見を少しすぎた地点のトンネルのなかで、列車が急にとまりました。鳥取県で大きな地震があったというのです。携帯電話もまったくつながらず、おそるおそる備中神代まで西へ向かった列車は結局岡山へ逆走し、午後9時前に岡山へ帰りその頃やっと電話がつながり、病院からの迎えの車で、深夜1時頃病院へ帰りつきました。患者さんの振り分けや紹介に大奮闘してくれました五代和紀、松浦隆彦両先生に案内された隣の旧中学校体育館の避難所はさながら野戦病院のごとき有り様であり事のただならぬことをさとった次第であります。地震当日夕方には重症の方は約10名高見徹先生のご好意で日南病院へ引き受けてもらいました。

病院閉鎖

夜中の会議のテーマは避難している患者さんを今後どうするかでした。地震によるひび割れもさることながら、水が全く使えない状態でいつ復旧するか見当もつかないことから、すべての患者さんを西部地区の病院にひきとってもらい新病院への移転をできるかぎりはやくするという判断を余儀なくされました。そうはいってもすでに新病院がすでに日野川をはさんだかわ向こうにできていましたので、それが大きな心の支えになりました。余談ですが、震度6強の地震は伯耆、出雲の国に紀元880年以来の大地震だそうです。

約1000年ぶりの地震が新病院の引き渡しが終わった1週間目におこるとは、これを僥倖といわずしてなにを僥倖というべきかと思いなおした次第です。

仮設診療所の開設と避難所回り

その翌日9日、県内各地からの応援の救急車で、西部各病院とりわけ博愛病院、国立米子病院の先生がたに30名弱まとめて面倒をみていただきました。患者さんの移送作業は午後2時には終わり、途方に暮れる間もなく役場の職員の方と町内10箇所の避難所巡りをしました。当日560名の血圧測定が中心でしたが、これが随分その後の対応に役立ちました。

10日から、看護婦寮での仮設診療所に2割、避難所に3割、残りの5割の職員は引っ越し作業に全力をあげるという割りふりをして、入院患者ゼロの状態に対応しました。

新病院への移転

視察にみえた鳥取県会議員の皆さんはなぜ新病院へ早く移らないのか、県の関係の許可は速やかに出すので急げといっていただきましたが、準備もあり11月1日から外来、10日から入院を開始して11月30日には入院患者74名と震災直前の人数に復帰してました。車のギアをローからセコにいれて、そろそろサードにいれた状態にまで戻りました。

11月18日少し病院も落ち着きましたので、医学部五年生のポリクリで四名の学生さんに新旧病院をみてもらい災害時の対応を講議させていただきました。本当は当所の計画どおり10月16日に避難所巡りでもやってもらったらもっとよかったと反省しています。

新病院の移転後10カ月経ち職員も元気がでています。

この度の震災にお寄せいただきました御厚情にあつく御礼申しあげます。

“さめやらぬ 余震の中の引っ越しに職員の背中 躍動す”

野戦病院のように

副院長　岡 野 一 廣

家での昼食を終え、病院の敷地内に入った途端に揺れはきた。最初は踏ん張ったがとてもだめだった。門柱の後ろの松の小枝に手を添えた。突然、川の向うのアスファルト道から水が噴き上がった。揺れがおさまり、病院の玄関に向かった。駐車場の大きい陥没が目に入った。

なぜか人の記憶はない。病院の玄関に入ると、なんと早い反応か職員の患者の搬出を見た。駐車場に引き返し、脱出する患者や職員を見渡せ、またその人たちに分かる位置に立った。

続々と職員に抱きかかえられてくる患者、ストレッチャーで運ばれてくる患者、誘導されて歩いてくる患者の脱出が見られた。恐怖に涙する患者、うつろな目の患者等混乱を極めた脱出直後から大きな余震の中でも次第に落ち着きをみせてきた。病院長、総婦長の不在を再確認し、まずは婦長らに入院患者の点呼、全員の避難確認をしてもらった。幸い全員大した怪我もなく、病棟に人のいないことを確認してもらい取りあえずほっとする。

しかしそれもつかの間、痰の喀出困難な患者が何人かいて、持続吸引器が必要だが停電のため何とかしてくれと看護婦から要請があった。しかしライフラインは全く使用不能であり、病院の自家発電装置はあるが使用場所が限定されており、その場所は危険なため使用不可能であった。発電装置を取りに行ってくると職員は出掛けたが、国道181号線の不通による交通の混乱のためなかなか帰ってこられなかった。

誰かが道の向こうの保育所に非常灯がついているのを見つけた。とりあえず吸引の必要な患者8名をそこへ運ぶように指示、内科医に付いてもらうことにした。

明日はどうなるか判らないが今日は病院を使うことはできない。保育所に運んだ患者は医療施設に移送しなければならない。残りの比較的状態の良い患者をどうにかしなければならない。これだけの人数を何とかするには町民の避難所になっているかも判らないが、病院裏の町民体育館しかないと判断し、局長に町との交渉を依頼した。

重症患者については、距離的には日南病院に頼むしかないと思い院長に電話する。院長は交渉を快く引き受けてくれたのだが、今度は搬送をどうするかが問題となった。救急隊に連絡するも全車米子方面に出払って今はないとのこと、また、国道181号線が通行不能になっているとのことであった。米子の救急車を廻してもらい迂回路をとり日南病院に搬送することとなった。8人を運ぶのにどれくらい時間がかかるのか患者はもつのか、暗澹たる思いであった。その頃から空をヘリコプターが飛び回り、会話や電話が困難な程であった。

中部の救急車の派遣も決まった。時間はどれくらいかかるのか想像もつかなかったが、米子からの救急車が到着したころ、国道180号線が通行できることになった。

今考えても奇蹟と思われる事態だった。日南病院から医者の同乗した救急車の応援を得た。高見院長に深謝。そのため比較的短時間に搬送を終えることができた。搬送終了後、再び国道は通行止めになった。そしてそれは長く続き、診療に通勤に日常生活に、それぞれ支障をきたした。幸い搬送途中で急変した患者はいなかった。一方、体育館の使用許可もおり、職員による大移送作戦が始まったが、人海戦術しかない消耗戦であった。患者や職員の協力もあり、大きな混乱もなく移動は終了した。中部からの救急車が到着したころには全て終わった後だった。

地震による負傷者のための臨時の外来を駐車場にテントを張って設営してもらった。とりあえず第一段階はおわった。これからどうするか管理職を集め、相談した。

後の記録によると、当日地震後、外来を受診した患者様は17名であった。骨折4名、腱損傷1名を他院に転送した。また体育館に避難後3名の患者様を他院に転送した。結局当日入院患者を11名他院にお願いした。

鳥取県西部地震を経験して

内科医師　松 浦 隆 彦

平成12年10月6日は私の一生のうちでも忘れられない日となりました。地震があった日は院長先生、五代先生とも出張でおらず、内科は私一人で午前中の外来をすませ、早めに病棟回診してしまおうとしていた矢先でした。地震の起きた午後1時30分、私は病棟婦長と3階の内科病棟にいました。遠くから地鳴りのような音がしたと思った瞬間に下から突き上げられるような揺れが来て、足下がすくわれたようで立っていられなくなり思わず座り込んでしまいました。揺れは30秒か1分でも続いたように感じました。揺れが止んで立ち上がれるようになると、いったい何が起こったのだろうと呆然とした気持ちでしたが、窓の外を見ると建物のてっぺんにある日野病院の看板が崩れています。取りあえずその部屋の患者さんの無事を確認し、他の部屋の様子を見て回りました。廊下に出ると埃が舞い上がり、非常扉が閉まりかかっていました。病棟の詰所は棚の物が崩れて散乱、足の踏み場もなくなっていましたが、意外にも患者さんの病室は崩れている様子もなく驚いている人も多くおられました。揺れた割にはさほど大きな事態にはなっていないように見えました。程なくして全職員が一斉に患者さんを外に避難させるということになり、みんなで玄関前に、ある人は抱えて、ある人は車椅子のまま、階段を使って移動させました。およそ20～30分くらいで全患者さんを避難することが出来たと思います。その時の気持ちとしては特に内科を一人で任されているような気持ちになりとても心細いものがありましたが何とか責任を持ってせねばと思いました。

その場の状況も凄く心配ではありましたが、すぐにいろいろ問題が出てきました。まず寝たきりの患者さんの中で喀痰吸引する必要がある方がありましたが、病院自体は停電しており、非常用電源もなく、吸引器が使用できない状態でした。人力で吸引する事も考えましたが、MRSAの患者さんも多く途方に暮れていたところ、看護婦さんの一人が保育園の電気が点灯していることに気づきました。私は走って保育園に駆け込んでコンセントを貸してくださるようお願いに行き、患者さんを保育園前に運んでからは状態観察をしつつ、今後の対応を検討しなければなりませんでした。

自分の家のことと日野以外はどのような状況なのか、今後患者さんをどうしたらよいのか問題は山積みでしたが、ラジオ等から少しずつ情報が入り、震源のことや回りの状況が分かるにつれ、まずこの重症の人たちをどうするかが一番の問題となりました。その頃、日南病院と連絡がつき、意外と被害が少ないとのことで入院患者の受け入れを頼めることになりました。それからは搬送前に紹介状の記入に追われ、夕方から続々と救急車による搬送が始まりました。夜の7時過ぎには搬送は終わりましたが、後は残った入院患者さんたちです。一晩体育館で過ごすこととなり、また、翌日から市内の病院に搬送が決まり、私の患者約20人の紹介状を書きました。体育館の中でもまだ余震が続いており、天井の大きいライトが落ちなければ良いと思いました。その時でも緊張が続いており、あまり被災したという実感はなかったのです。

朝9時頃から、それこそ鳥取県内すべての救急車が来たのかと思うほどフル回転で患者さんを搬送していただきました。どの患者さんにも「元気で頑張って」としか言えませんでした。午後1時くらいに最後の患者さんを見送り、すべての搬送が終わりました。2日間めまぐるしく過ぎていき自分でも何をしていたか分かりませんでしたが、やるだけのことはやったという充実感はありました。ただ、人的被害はありませんでしたが、病院職員を含め多くの方が震災の被害に遇われ、私としても気分は複雑でした。今回の震災での経験は私の人生の中でもとても貴重なものとなりました。

信じられませんでした

鳥取大学脳神経内科　医師　足 立 晶 子

私は日野病院で非常勤医師をして週に2回脳神経内科の外来診療をさせていただいています。鳥取県西部地震のあったその日は丁度その外来診療を行う金曜日でした。

極めて主観的な記憶ですが、地震の起こった時の様子を思い出すままに綴ってみたいと思います。

その時、私は1階の内科外来で入院中の患者さんを診察していました。脳梗塞で入院され、右手が少し動かしにくいその方に、字を書いていただく検査をしている時でした。突然、ゴーと大きな音がして足もと全体が上下に揺れました。鈍感な私は一瞬何がおこったのかわからず、次の揺れで机がずれていくのをみて、地震と認識しました。一連の揺れが一旦治まりました。ふとみると先程まで検査で字を書いていただいていた方がそのまま椅子に座って、何事もなかったかのように続きを書いておられました。無事であることを見てほっとすると同時に、地震に動じない姿にびっくりし、妙に気持ちが落ち着きました。廊下に出ますと停電で真っ暗でした。水道も止まっていました。内科の松浦先生が3階から降りてこられ、病棟は建物の被害がひどいことがわかりました。病棟に向かうと、どこからか全員避難だと誰かが叫んでいました。誰からの指示かわかりませんが、正しい判断でした。病院の職員の誰もが病棟に向かい、そして一生懸命に患者さんの避難のため全力を尽くしていました。停電でエレベーターが使えないため、2階や3階は車イスやストレッチャーは使用できず、階段を降りるしかありませんでした。私も3階の歩くことのできない患者さんを看護婦さんと共に抱えて病院前の駐車場に運びました。患者さん全員の避難が終わるまで、とにかくみんな必死で、いわば火事場の馬鹿力を発揮していました。数十分後、本当にあっという間でしたが、気がつくと全員が病院玄関前の駐車場にいました。隣の保育園からも先生と小さな子供たちが避難してきました。時々余震が起こり、地面と病院の建物が揺れていました。青空の下、駐車場に置かれた椅子や病院の建物が揺れるのを見ておられる患者さん達の姿は何だか痛々しく感じられました。

病院で地震によるけが人がなかったことと雨が降っていなかったという点は助かりました。カーラジオからは地震のニュースが流れていました。震源地は何とすぐ近くで、日野町の震度が最大とのこと、皆が改めてびっくりしました。普段大きな地震が起こることなど考えてもいなかったので、信じられない気持ちでした。私は夫の両親が阪神大震災で被害に遇っており、地震の恐さを多少は理解していたつもりでした。しかしまさか自分自身が体験するとは思ってもいず、危機管理能力のなさを反省しました。それにしても驚いたのは地震直後に避難する時の病院職員の方々の対応の速さと団結力でした。情報量が不十分で皆さんそれぞれ御自宅や御家族のことが心配であったことと思いますが、本当に一生懸命働いておられました。またその後も避難所支援、診療再開、新病院への移転までいろいろと大変であったことと思います。

地震の後、脳神経内科の外来に来られる患者さんの中にもいまだに血圧が上がり、不眠など体調を崩されたままの方、仮設住宅に暮らしておられる方があります。今回の地震の経験は今後の教訓として役立てていかなくてはなりませんが、地震が人に与えたストレス、傷跡は一日も速く消えてほしいと願っています。そのために、今後も診療を通してわずかでも、お役に立つことができれば幸いに思います。

これはフィクションではない

鳥取大学医学部 眼科医師　長谷川 次 郎

先日の大地震には何の因果か出張先の日野病院で遭遇しました。

尋常ならざる揺れの最中考えていたことは、これ以上揺れたらこの建物はとても耐えられないだろうということでした。老朽化は見た目に明らかで、この年末には新病院への移転を控えていたのです。補助電源も破壊され瞬時に停電し、外壁は剥脱、窓硝子は破損、天井の構造物は脱落し、屋内にいた人は誰もが身体に危険を感じ、避難を考えたと思います。

本震のおさまったあと、案の定、事務職員が全員屋外避難を告げて回ってきました。しかし、中山間地の病院には自力では動けない患者ばかりで、職員にはこの人たちを避難させる義務があります。この後は特筆すべき数分間でした。確固たる指揮、命令系統もなく、各自が自らの判断で全患者、必要な寝具、医療機器、器具を屋外へ運び出したのです。

何度か訪れる余震の中、ほの暗い狭い廊下、階段、病室を全職員が右へ左へ、上へ下へ駆け回りました。この間心の中では「これはフィクションではない。現実の出来事だ」「余震で倒壊したら生き埋めになるかもしれないな」と何度もつぶやき、事実の受容を拒否する気持ちと不安でいっぱいでした。この恐怖の中、職務を全うした日野病院職員の職業意識、人倫の高さには感動を禁じ得ません。皆さん本当にご苦労さまでしたとこの場をお借りして言いたいと思います。

（鳥取大学眼科　同門会誌より）

▶足の踏み場もない状況となった医局内

地震の恐怖

外科医師　辻本　実

鳥取県西部地震がおこった日は、秋のよい天気の日であった。日野病院という震源に最も近い所で最も高い3階の医局に座っていた。突然ゆらゆらと体が揺れてきた。「あっ地震だな」と思っていたら、そのうちに突然お尻から突き上げられるような衝撃があり、本棚の本が落ちるわ、ロッカーは倒れてくるわと、大変な騒ぎになった。「逃げ出すにもここは3階でどうしようもない」と開き直り、倒れかけたロッカーを片手で支えていた。揺れがおさまると医局は、足の踏み場もないほど物が散乱していた。あわてて物をかきわけて廊下に出て、薄暗い中を病棟に行った。驚いたことにそこではすでに患者さんをどんどんと外に運び出しているではないか。当然エレベーターは止まっている。抱きかかえておろす者、毛布を即席の担架にして運ぶ者、みんな誰が指揮を執っている訳でもないのに怒号もあわてた様子もなく、あわただしさだけがあった。常識的には病院の建物が一番安全なはずであるが、あちらこちらにひび割れを生じ、元からかなりくたばっていたこの建物が安全であるはずもなかった。

余震の中、次から次へと患者さんが中庭におろされていった。一時間半ほどで全員が避難できたのは驚きのかぎりだった。ある人はベッドに横たわり、ある人はベンチに座り、ともかくも不安のある建物を出て落ち着くことができたのだ。外は、暖かく天気もよくて、たいへん幸運であった。しばらくは、時々起こる地面の震えに脅えながらひび割れた建物をながめていた。しかし、もうしばらくすれば日も暮れてしまうし、病院には戻れないため、夜をすごす場所が問題となった。そこで患者さんを裏の体育館に収容し、転院できるものは転院させることになり、また大騒ぎとなった。ストレッチャーで体育館まで何往復したことか。看護婦をはじめとして、職員全員が布団をひき、患者さんを運んではおろしてと休むことなく動いていた。日ごろからよく働く彼女たちだが、どこにこのようなエネルギーがあったのかと思えるほどの立派な働きだった。自分は途中より救急車に乗り、術後の患者を国立米子病院まで転送した。米子までの道路は、思ったより壊れていなかった。所々で屋根の壊れた家を見かけ、道路の陥没した所があったが、米子の町は何事もなかったように、平穏に見えた。あらためて病院の周りの被害の大きさに驚いていた。患者を転送したのはよいが、帰りは救急車に同乗を断られ、途方にくれ一人じっとタクシーを待っていた。しかし、その間に実際に被害を受けたものと、後方で受け入れるものとの温度差というものを実感できた。国立米子病院で見たテレビは「阪神大震災以来の大きな地震」と感情をおさえた声でニュースを伝えていたし、まわりの人々も「あまりたいしたことがなくよかったね」と話していた。「大変だったんだぞ」と叫びたいような気分であった。タクシーで帰りついたのは夜の10時をまわっていた。

病院へ帰ると体育館の中は、広い体育館いっぱいに多くの布団がひかれ、点滴や救急用のセットが手際よくおかれ立派に即席の病院となっていた。しかし、夜になるとどんどん冷えてきて、暖房のないのがつらく、赤十字よりの毛布が暖かかった。しかし、たびたびの余震におびえながら体育館という非常に安全な所に泊まれたことは安心であった。差し入れのパンをほおばりながら野戦病院さながらのように過ごした日々を忘れないだろう。懸命に人を抱え、ベッドを押し、地震の恐怖の中を、よくあの短時間であれだけのことが成し遂げられたと、今思っても奇跡のようだと思う。自分もみんなも体の奥から力をふりしぼった結果であったのだろう。しかし、結果的には私は医者らしいことはほとんどやらなかった。その日は、大きなけがの患者さんは来なかったのだ。今思っても死者や重症者がひとりも出なかったことは、たくさんの幸運に恵まれていたのだと胸がいっぱいになる。

地震の反省

日野病院　婦長　枝 原 瑞 江

10月6日1時30分頃、米子市で開催されていた介護サミットに出席中の私は、会場のコンベンションセンターの椅子と共に揺れ動いていました。建物の外に出たものの地面は揺れ続けていました。電話が通じない、携帯も繋がらない。周り中、皆いらだって何事が起こったのか理解出来ない状態でした。コンベンションセンターのロビーのテレビが臨時ニュースを始めました。瀬戸内海沿岸の県が震度3、4等と映像が流れ、日野町が震源地で震度6＋と出ました。首相官邸に災害対策本部が設置され、大臣が続々集まる様子がテレビに映っています。これは大変な事なんだと認識しましたが、日野町の映像は、マップと状況はまだはっきりしないと言う役場職員の声のみでした。根雨に帰るバスの手配がやっと出来、帰途に着いたのは4時過ぎになっていました。

途中、家の棟の壊れたのが多くあり、根雨ではどんな事になっているのかと気が気ではありませんでした。5時過ぎに病院に帰りつくと、病院の丁度前にある保育園の園庭にベッドが入っており、5～6名の患者さんがおられました。この保育園に居た人は重症の患者さんで、酸素吸入等している人でした。日南病院さんへ移送するよう手配出来ている患者さんでした。他の患者さんは丁度病院の裏手にある町の体育館に移っていました。一人の怪我人も出さず避難できていた事に、スタッフの働きに感謝致しました。

水道が切れていたので、体育館のトイレには大きなポリバケツ4～5個に川の水が汲んでありました。事務職員がすぐに対応してくれたとの事でした。一夜は体育館の中で患者63名と共に過ごしました。新聞社、テレビ局、色々と取材がありました。余震が続いていましたが、患者さんは比較的静かにしてくださったので夜勤に当っていたものも救われました。病院の破損状況から使用不可能と判断され、63名の患者さんには転院か家庭に帰っていただくことになりました。

一夜明け、7日に患者さんの転送が始まりました。搬送先、搬送順番、同乗する看護婦等の決定等、あわただしく取材等にも気をつかいました。広域消防の方々に大変お世話になりながらすべて搬送が終了致しました。看護部は日南病院への応援勤務と避難所支援とに取組みました。避難所へは午後8時まで居ることとして、町民の皆様への相談相手になったり、健康管理、治療の手助けを行いました。土砂崩れが発生し、迂回路を通ったりして通勤も危険な状況でした。ヘリコプターの音や、取材も多くあり、私もスタッフもヒステリックになった時期もあります。倉庫にしていた元職員寮を整理して一部外来診療を開始する等、1週間は騒然とした状況でした。非常事態なのだから何でも指示したことはスタッフがしてくれて当然と言う思いでいました。スタッフのおびえている気持ちにきめ細かい対処ができていなかったと反省致しております。

▲避難所での回診

地震の恐ろしさ

看護部　吉川千明

10月6日、1時30分、昼食を終えた時、ガタガタと揺れはじめました。「いつもの地震、すぐおさまる」と安易に思っていましたが、その揺れはなかなかおさまらず、だんだん大きく揺れてきました。急いで廊下に出ると、砂塵が立ちこめまっ白、非常扉は閉まり、反対側の様子は見えませんでした。それでも揺れはおさまろうとせず、大きく来る揺れには、廊下の手すりを握るほどでした。

廊下からボイラー室を見た一人が、煙が出ているのを発見、火が出る危険を感じずにはいられませんでした。すぐ事務に通報して、大事にならずにすみました。

そして、患者さんの避難に加わりました。エレベーター使用を禁止し、階段昇降で、みんな一生懸命でした。動ける人を誘導する人、動けない人を背負う人、二人で抱える人、次々と避難できました。時間はあまりかかっていないような気がします。多分、2階で最後になったと思う重症患者さん（その日に永眠されました）は動かすことにより命の危険が考えられましたが、避難しないのはまだ危険です。数人で、シーツごと運びました。途中でレベル低下しましたが、無事避難できました。最後、病室に残っている人はいないか確認もできていました。

避難した玄関の駐車場では、リーダーが点呼、全員の避難が確認され、ほっとしました。2階の患者さんの側についていましたが、必要物品も運び出され、毛布を掛けたり、ベッドに移したり、いすに坐ってもらったり、次の作業もどんどんできていました。酸素ボンベ、吸引器も出されましたが、電源がとれず吸引もできませんでした。保育園で電源がとれるということで、吸引の必要な患者さんはベッドごと移動しました。2階からは2名移動、リーダーより受け持ちがつくように指示があり、吸引、補液、観察に当たりました。それでもまだ、揺れは続いていました。

少しおちついた頃、水の配給もありました。だんだん外は寒くなり、薄暗くなってきました。布団だけでは対応できなくなります。不安に思っていたところに、日南病院に6名受け入れてもらえると情報が入りました。状態で搬送順番を決められ、指示に従いました。看護婦が一人ずつ搬送に当たりました。一人ずつ、救急車が動くごとに、とても安心した気持ちになりました。

避難された他の患者さんについては、社会体育館の方に全員避難が終了していました。

地震の恐ろしさを体験し、みんなの協力の強さを今でも感じずにはいられないでいます。

▲避難先の社会体育館（写真　共同通信社）

今までにない恐怖感

看護部　竹 永 真由美

平成12年10月6日午後1時半、昼休憩も終り午後の仕事に取りかかろうとしていたその時間、いきなり大きな音と共に大きな揺れ、棚からの落下物。今までに感じたことのない恐怖心で詰所の机下に入るのがやっとで、揺れがやや治まりかけた頃ふっと我に返り病室に行かなくては…！と思い飛んで行きました。駐車場に患者さんを避難させるのも揺れを感じて怖がっている余裕もなく停電で薄暗い病棟内を2階、そして3階と走り回り、あっという間の避難行動だったように思います。

駐車場の一部は大きく陥没し手術場の窓ガラスは無惨に割れ、日野病院の看板は傾き地面の上にふとんを敷き横になられている患者さんの姿はまるで野戦病院のようでした。

社会体育館に避難された患者さんの中に不穏状態になられた方がおられ、医大に搬送することになりついてでました。途中、道路と橋の間にできた大きな段差、傾いたバス停、ゆがんだ道路、崖が崩れ一方通行になっている所やその他地震の被害を受けた所が沢山あり、病院も大変なことになってしまったけど、家は大丈夫だろうか、と思いとても不安になりました。米子市内に入ると何事もなかったかのように平穏な様子で日野町の被害が嘘のようでした。結局家に帰ったのが夜10時半頃でした。私事を言いますと、当日朝、主人は視察で国外に出発しており、全く連絡もつかず、この日ばかりは息子がとても頼もしく思いました。家の中の様子をみて私が驚いていると、「もう2階にはあがるなよ」と息子に止められましたが両サイドから倒れているタンスの上をよじのぼって、着替えの服をどうにかとってもらい、住めるような状態ではなかったので2日間本家に泊めてもらいました。2階の子供部屋の壁は落下し外が見える状態だし、階段は割れているし、玄関天井は落ち、内壁も落ち、もちろん食器棚は倒れ、食器のほとんどが割れ、こたつはタンスの下になりつぶれているし…。

▲ブルーシートをかけられる被害を受けた民家

家も大変でしたが、翌日全員出勤ということで本家から病院に向いました。仕事を終え帰宅すると、ちょうど村の人達や大勢のボランティアの方々が屋根のシート張りをして下さっていました。この度の地震で私はボランティアの方々に本当にお世話になりありがたく感じました。あの日から、はや1年が過ぎようとしています。病院も新しい建物で診療ができるようになり、旧病院の片付けや新病院への移転準備とあわただしい毎日の中、家の整理や修理に追われ、又、店の片付けや営業再開の準備と本当に忙しく大変な日々だったように思います。この大きな地震にもかかわらず、患者様、職員、そして職員の家族に被害がなかったことは何よりも良かったと思います。

長い一日

看護部　小林博子

10月6日、3階にて勤務中。昼食を終え、スタッフの一人と一緒に、少し記録でも…と机に向かった。突然ゴーと、ものすごい音がした。何の音だろうと思った瞬間、グラグラと激しく大きく揺れた。声も出ず、とっさに机の下に身を潜めた。物が大きく動き、棚や机の物がドサドサと落ちた。長い長い時間だった。揺れが止まり、顔を見合わせると同時に、「患者さん」と、立ち上がった。詰所の中は物が散乱し、足の踏み場もなかった。病室へと走った。一人一人顔を見て無事を確認し、声をかける。一人いないと気づき、トイレへ行って見た。壁が落ち、物が壊れ、散乱している。患者さんは洋式トイレに座ったまま、埃にまみれていた。見たところ怪我はない。声をかけると「大丈夫だ」と返事があり、誰ともなく患者誘導を始めた。

まず、歩行できる人を集め、ロープにつかまってもらった。他部署からの応援の人に頼み、護送の人は患者さんを何人かで抱えたり、背負った。担送の人はシーツで駐車場へと運び出し、地面の布団の上や、待合い椅子の上に降ろした。「全員避難、死傷者なし」ホッと胸を撫でおろす。「みんな無事で良かった」「恐かった」「どうなるかと思った」など、さまざまな思いが込み上げ、ガタガタと足が震え、涙が出た。

余震の中、カルテや救急カート、回診車、点滴、薬品、紙オムツなど備品が運び出された。私は気管切開の患者さんや重傷者をみていた。痰がらみがあり、吸引が必要だが、吸引器が使えず、カテーテルと注射器で引いてみるも吸引できなかった。「このままでは大変なことになる」と、みんなであたりを見まわした。「保育園に電気がついている」と誰かが見つけた。地面に寝かせていた患者さんをベッドに移し、保育園へと運び、電源をかりて、吸引器が使える様になり、ひと安心する。

ふと、家人や家が心配になり、不安になるも連絡のしようもなく、無事を祈った。

▲壊れた民家の屋根

15時を過ぎる頃より、少しずつ寒くなりはじめ、布団を掛けて保温する。しばらくして、重傷者は転送。他の患者さんは、社会体育館へと移動する事になった。私は日南病院へ転送する事になった。国道は土砂崩れで通行止めとなっており、初めての迂回道を通った。道はうねり、何十カ所もひび割れし、段差があり、大きな岩がころがっていた。30分程の道で1時間以上かかり、着いた時には暗くなっていた。日南病院では、院長先生や患者さんをはじめ、たくさんのスタッフに迎えて頂いた。全員の転送が終った時には、20時を過ぎていた。長い長い、大変な一日だった。幸いにも天候が良く暖かい日であった事、平日の勤務帯で人手があり、全員のスタッフが手際良く避難誘導できた事が、不幸中の幸いだったと思う。

災害のない町と自慢していたのに、この様な大災害が起こり、いつ、どこでどうなるかわからない事を再認識したとともに、今も余震があり不安な日々だが、二度と起こらない事を願っている。

忘れられない10月6日

看護部　新 田 ひとみ

今年は紅葉も遅く秋の気配をあまり感じないまま10月を迎えようとしている。

去年の今頃はまだ農作業も残っていたし、我が家の、増築新築工事も控えており、何となく落ち着かず慌ただしい日々を送っていた。大工さんと相談しながら、棟上式を10月3日に決定し準備を進め、素晴らしい秋晴れの中、無事棟上を終えることが出来た。大きな行事を一つ終え安堵する一方で、次に控えている仕事の事が頭をよぎった。

明日10月4日の夜勤をし、10月5日明けた後10月6日には勤務の都合をつけ、新病院移転準備委員として3階詰所（内科病棟）の備品チェックを行う予定にしていた。

10月6日朝、担当者で話し合いを行い午前中より少しずつではあるが、チェックを始めていた。普段のように、昼食を取り、午後の業務を開始したとたん、あの大きな地震が私達を襲った。最初、あれ？地震？と思ったとたんほんのわずか数秒後には、世界は全く変わっていた。地震の最中物が最初に棚から落ち始めた時、直感的にどうしよう、片づけるのが大変と思った。そんな余裕を見せたのも一瞬で終わり、一緒にいた看護婦と顔を見合わせ、このままでは危ない、机の下に入ろうと声を掛け合い机の下に入ったのだが、その瞬間に机の脚が折れ頭の上へ覆い被さってきた。すでに、詰所の中は壊滅状態。とにかく揺れが収まるのを待った。

その後、床に散乱した物を足でかきわけ、踏みつけながらやっと詰所から出ることが出来た。ここからは、とにかく一刻でも早く患者さんを安全な場所へ誘導しなければと思った。

まず、歩行可能な患者さんには、火災避難時使用するロープを持ってもらい、誘導者を付け避難して頂いた。護送、担送患者さんについては全職員が協力し速やかに避難、誘導した。火事場のバカ力改め、地震場のバカ力、思わぬ力が出るものだと実感しつつも全員が病院前の駐車場に集まった時、改めて事の重大さと、恐怖がわたしを襲った。しかし、いつまでも同じ事を考えているわけにはいかなかった。避難、誘導したものの、次々に新たな問題が、山のように私達に降りかかってきた。アスファルトの上に寝ていただくわけにはいかない、しかしベッドが足りない。出せるだけのベッド、ストレッチャー、長椅子、等運び出した。患者さんの安楽、保温を考え、できるだけの物を運び出し、入院患者さんは元より、次々と運び込まれてくる外傷や熱傷を負った救急患者さんに、必要な薬品、物品、処置器具等の準備、施行と慌ただしく時間は経過していた。避難していた患者さんの一人の様子がおかしいことに気づき、みたところ気管切開をしている患者さんでどうも痰が溜まってきているらしい。早急に喀痰の吸引が必要になってきたが、病院は、先程の地震で、電源が切れている。自家発電のある手術室はあまりにも遠いし、間に合わない気がした。とっさに辺りを見回し何処かに灯りの付いているところはないか探した。すると50m程離れている保育園の窓から蛍光灯の光が漏れているのを確認した。保育園の了解を得るのは後回し、とにかく吸引の必要な患者さんを7名程移動しかけた。その光景を見て、保育園の園長先生はもとより、他の先生方や、たまたま居合せた土木作業員の方達が無条件で手を貸して下さった。看護婦も、電源さえあれば大丈夫と物の散乱した病棟から素早く吸引器を運び出してきた。

あっという間に保育園の庭は医療現場と化した。吸引も出来る、点滴も出来る、保温も今の所大丈夫、経口的に水分をさしあげることも出来る現状を考えると、あの惨状の中、短時間でけが人も出ずよくここまでできたなと少し勇気がでてきた。みんなの力って素晴らしいと改めて感じた。

ふと、我に返ると様々な不安と心配が頭をよぎった。

自分の家は大丈夫か、子供は、夫は、実家は被災地に近い、母親は多分山のてっぺんで仕事をしている。皆、大丈夫なのか、しかし、それを調べる手立ては何処にもなく、ただただ無事を祈るだけしかなかった。

地震から、何時間経ったころだろうか、心配している私の目の前に夫の姿が見えた。夫も仕事で、地震の時は車に乗って移動していた、しかし、行く道行く道は地震の為寸断されており思うように進めなかったのだと言う。でも夫は、自宅や子供の様子、実家の様子等を一応見て来たと私に伝えてくれた。その時点では、ひと先ず安心しつつも幾つかの心配は残っていたが、今はどうしようもなく仕事を優先しようと頭をきりかえた。今日の私に残された任務は、8名の患者さんを無事転送する事であった。

日南病院への道のりは普段であればそう遠くないはずなのに、あちこちで巨大な石が道路の真中を占領しているかと思うと、国道に沿って出来た大きな亀裂は救急車を楽には進めてはくれない。それでも、日南病院への転送は、夜の9時過ぎには何とか終了した。完壁ではないしろ露天にさらすことだけは避けられた。他の患者さんは、日野町の社会体育館に避難することになり、スタッフはもちろん医療器具、寝具、食料などを運び込んだ。

とりあえずその日は解散となり家路へと向かうつもりだったが、気になっていることを自分の目で確認しようとまずは実家に立ち寄った。とりあえずみんなの無事な姿を見て安心したのだが、私の目の前にあった生家は、大きく傾き家の中には亀裂が入り、戸という戸は九の字に折れ、襖や壁紙はビリビリに破れていた。一目で再起不能を実感した。悲しくて、残念な気持ちを胸に今は仕方がないと思うことにして家路へと急いだ。家に着いたのは夜の10時を越えていたが家族はまだ全員起きていた。皆、大丈夫だった？と声をかけた目の前にはいつもの姿があった。ひと安心、でもこれから片づけが待っていると思ったらぞっとするなんて一人で考えていると、「お母さん、食器棚から落ちたり、中で壊れていた食器はこれだけ」と見せてくれたバケツの中に山盛り一杯入っていた。「棚の中も、外もちゃんと掃除機で吸っておいたから」と息子からの言葉に感動と感謝の気持ちで一杯だった。おかげさまで夜ゆっくり休ませてもらったのは私だけだったのかもしれない。そして翌日、10月7日の朝がやって来た。

今日は、全員出勤で社会体育館に避難して頂いていた患者さんへの対応が待っていた。10月6日当日の夜勤をされた看護婦さんや事務関連の職員の方はさぞ大変だったのではと思いつつ社会体育館に足を踏み入れた。そこは、まさに野戦病院さながらの状態だった。固い床に布団を敷き、十分でない医療器具の散乱している中で、水分と食料、点滴をしている患者さん、プライバシーも確保されていない場所でのオムツ交換、体育館の隅に簡易に設けられたトイレで介助を受けながら排泄をしている患者さんもいる。不安と苦痛を表面にも出さず、それでも何とか一夜を過ごし自分の落ち着く先を心待ちにしている患者さんではあるが明らかにその表情はいつもとは違っていた。

▲避難所の様子

早く何とかしなければ。はやる気持ちを抑えながらスタッフの打ち合わせが始まった。結果、軽快に向かっている患者さんは一時自宅へと退院して頂くことになり、Drの指示のもとリストアップを行い家族へ連絡を随時とることにした。

又、治療の必要な患者さんには他の病院へ代わって頂くよう転医先の手配からその手段をDrと話合いながら計画を立てた。一応全ての患者さんのリストアップが終わると同時に転送が開始された。患者さん一人に対しても、Drの紹介状から看護記録、内服薬、辛うじて運び出せた身の回りの物等一通り準備した。随時、搬送に協力して頂く西部消防の方と連絡を取り転院して行くのである。

社会体育館の外には常時2～3台の救急車が待機されており順序良く看護婦、救急隊員同伴の上目的の病院へと搬送された。根雨から米子、米子から根雨と何回もピストン搬送され、その日の3時に終了した。出動した救急車は東部消防から鳥取消防、羽合消防、東郷消防、西部消防から米子消防、境消防、西伯消防、溝口消防、江府消防、生山消防と鳥取県下全域にわたりご協力いただいた。

今日1日を振り返って考えても、私達は物を扱っているわけではなく、一人一人の命を預かっており責任がある。ただ責任と言葉にして表現するのは簡単かもしれないが、私にとっては一番難しい目の前の課題でもある。患者さんをほんの少し移動するだけでも、一言声をかけるにしても、患者さんの私物を少し動かすにしても、一つ先を考え、こうしたらどう思われるのか、喜んで頂けるのか、気分を悪くはされないか等、常に気に留めながら行動したい。それが、今回のような非常時に回りを軽視して行動していないか、その結果患者さん、患者さんの家族、スタッフ、ボランティアの皆さんに迷惑をかけたり不快な思いをさせたりはしていないか、落ち着いて考えて見ると何とも不安になるが今を乗り切る為に頑張ろうと思うことにした。

そして、私は今日、この体育館の中で意外な光景を目にしてしまった。患者さんの搬送の最中、辺りは雑然としスタッフ一人一人の顔さえゆっくりと見ることもなく、自分の周囲の事と、次の搬送患者さんの事だけ段階を踏みながらクリアしていた。現状からすればロスタイムを最小限に抑え、効率的にかつ安全に事を進めるのが最優先されていた。ところが、搬送目的の救急車を見送って体育館の中に入ったところでふと五代Drに目が行った。

五代Drの目からは涙がとめどなく溢れていた。こんな中途半端な形で、こんな雑然とした中でろくに言葉も交わすことも出来ず退院や転医をして頂かなくてはならない事をほんとうに申し訳ないと思う、と言葉を詰まらせながら話された事を私は忘れる事が出来ない。同時に私も同感しそれまで抑えていた気持ちが一気にこみ上げ体育館の隅で涙を拭いた事も忘れないだろう。この地震さえなかったら、こんなにひどくなければと大自然の猛威に対して人間っていかに無力で小さい物なのかを思いしらされた。でも、この地震が昼間に起こり震災が原因で亡くなったり、負傷されたりする事が無かっただけでもせめてもの救いだったような気がする。そして、マンパワーの素晴らしさ偉大さにただただ感激をするばかりである。

後は復興に向かって皆で協力し合い、一日でも早く患者さんに帰って来て頂く病院をつくり上げ、笑顔で迎えられるようにする事だと思う。

忘れられない10月6日、忘れようにも忘れられない、忘れてはいけない10月6日。鳥取西部地震私が今まで生きて来た中で、そしてこれからの人生の中でも一大事として記憶に残る事でしょう。

もう二度とないように…

看護部　青 木 久 枝

夜勤に向けて、ひと休みしようと横になったその瞬間、家がゆれた。

気が付いたときは素足で外に立っていた。気を取り直して家の中に入ってみると、今まで経験したことのない物の散らかり様に、何から片づけようと思っていると、下の方（日野町）が大変らしいと聞き、早めに職場に向わなくてはと車で走り出した。ところが道路の亀裂、山崩れ、自動車より大きな岩の崩れ、空にはヘリコプターの音…。しかも自動車は渋滞で思うように進まない。やっと到着したときに見た職場の姿に足が地に付かない思いだった。その時すでに患者さんは体育館に避難されており、けが人もないことに感動した。

避難先の体育館で余震に震え不安な表情の患者さんをみながら、「これが夜勤帯に来ていたら…」と思うと胸が締め付けられる思いでした。もう二度と、このような災難がないように祈ります。

当時のことを振り返り、思い出したことを書き記します。

＊キャスター付きベッド3台以外は、床に直接敷いた布団に休んでもらう。
＊夕食はパン、バナナ（職員がスーパーに買いに行った物）朝食はパン、バナナ、ヨーグルトも数がなく分け合った。給食が炊き出しでおかゆを作ってくれた。
＊23時30分に自衛隊よりお弁当が届く。
＊他町村より水、ホカロン、オムツなど届く。
＊深夜になり明日には全員の転送をすることが決まり朝までドクターは添書を書いていた。
＊全員、他病院が受け入れてくれることを祈りながら勤務を終え帰宅した。

▶地震後の病院
駐車場内に受付テントを設置し診察を開始した

今わたしにできること

栄養管理室 管理栄養士　仲 石 康 子

10月6日午後1時30分、厨房内は昼休憩で静まり返り、私達はいつものように仕事をしていた。私はコンピューターの前で来客があり、立って話していた時のできごとだった。

「あっ！地震だ！！」いつもの揺れと違い、だんだんと大きく揺れだし、すぐに停電になった。やっとの思いでコンピューターの電源を消した。机のもの、棚のものすべてが落ち、ものすごい音でガラスが割れた。

厨房の洗浄室側の大きな窓も2枚壊れておりとても危険な状態だった。少しおさまったのであたりを見まわしてみると、ボイラー室の屋根から煙りが！でも大丈夫だということがわかり患者さんの方へ向かった。とにかく3階から行こう！！と歩いている患者さんに手を貸し、ついて歩いていたが、あわてられてうまく歩けない。患者さんを背おって玄関外まで出、イスを持って出、座ってもらい、いろいろなものを持って出たあと、少しでも恐怖感がやわらぐ様患者さんに声かけして廻り、寒くないか心配したり必死だった。

外来の患者さんで揚げ物をしていた時に被災し、両ひざから下が真っ赤になり皮もむけ、はだしになって来られた方があった。当院の厨房はちょうど昼休憩で、ガスも使ってなく良かった、もし仕事中だったらどうなっていたか…と思うとゾっとし、寒気がしてくる。

患者さんを社会体育館に移動させ、だいぶ終りに近い頃私達は夕ご飯のことが心配になり、入江課長に了解を得てから全員集合をかけ、夕食準備に取りかかることにした。しかし、余震は続いており、中は停電、ガスも点検してもらわないと使用できない。

ガス台は動かないものだと思っていたのだが太いパイプを跨いで移動していた。地震はすごい力があるのだと改めて恐さを思い知らされた気がした。

そして水も使えなく、パニック。緊急献立作成。4段階で食事を提供することにした。食糧はあるがとにかく早く提供できるものをと、パンとバナナと水とお茶の確保に3班に分かれ買い出しにいくことにし、私は連絡係に残った。時間が早くてパンはたくさん買いしめることが出来、ガスコンロとガスは農協さんから借りる事が出来たが、お粥を炊こうと思っても水がなくてとぐことも出来ない。幸い近所の職員さんの家で水が出ることを聞き、といで来てもらい、外のブロック壁のところで野菜を入れたおじやを何とか時間に間に合い炊くことができた。

パン食に、お粥食・ペースト食・きざみ食と充分ではなかったが、患者さんに提供する用意ができた。幸い倉庫と冷蔵庫にたくさんの品物があり、皆の知恵を出し合いながら作れた。あったかい汁物でも作ろうとしたのだが、もう一台のガスコンロの調子が悪く、なかなか湯も沸かずあきらめざるを得なかった。

全員で社会体育館の方へ食事をもって行ったが、その時すでに10人位の人が帰宅・転院されていた。各階の看護婦の指示のもと全員の患者さんに食事提供ができた。私は全員の患者さんに「ごめんなさい、充分なことができなかったけど、元気を出して食べて下さい」と声かけして廻った。“今私に出来ることはこれ位しかない”と思いながら声かけして廻っている途中、ある70才位の女の人が「家の者でもそんな事言ってくれないのに、ちゃんと食べさせてもらってすみません」と涙を流して言って下さったり、病気の為食べられなくて病室に何度も訪問した患者さんから「今日はこんなに食べたよー、うれしーい」と声をかけられる。患者さんから反対に元気を頂いたような気もした。

恐怖感で食欲のない人、ガタガタふるえている人、どうにか気持ちを和らげてあげたいけど、どうにもできない私…ただ声をかけてあげること位しか今の私には出来なかった。

▲地震直後の病院内はあちこちがこのような状況であった

その頃、私には自分の家の心配をする余裕はなかった。

厨房の電気は、外が暗くなりかける頃にはついた。農協さんにガスの点検をしてもらったら、ガス室に亀裂はなく心配なかったが、ガス管とバーナーを結ぐパイプが全コンロともはずれていたことには驚いた。8つあるガス台（蒸し器も含む）全部みごとにはずれていた。修理して頂き、使用OKという事。これでガスが使える。あとは水だが、水道管が天井をはっていないのに、ガス台の横まで天井から水漏れする為、厨房の水道は使えない。止むを得ず厨房の水道は止める事にし、一番近いボイラー室より水をもらうことにした。これで何とか食事が作れる。何度も連絡して下さった、委託のメフォス日南の滑田さん、岡山より廣岡課長さんが心配して来て下さり、この夜遅くまで、献立変更、作業手順、食数、食種の確認など栄養管理室が1つになり話し合った。日南町は被害があまりなく、学校も土曜日で休みということもあり、翌朝手伝いに来て下さるということで、早番はいつもの2人に加え、メフォス栄養士・病院栄養士の5人で朝食準備をする計画を立て、厨房奥の休憩室で仮眠した。数え切れない余震の度にガスは大丈夫か、電気は？の不安があったが「大丈夫・大丈夫」とみんなに激励しながら一夜を明かした。

翌朝4時半頃に起き、朝食準備に取りかかった。昨夕できなかった分まで頑張らなければ…パンにスクランブルエッグ、味噌汁、お粥、ペースト食、きざみ食、お茶、牛乳又はヨーグルト、果物と、限られた中での食事がテキパキと作れた。盛り付けは社会体育館の方で盛ることにし向かったが、この時点でも帰宅、転院している人があり、材料がたくさん残ってしまった。しかし、患者さんと当直者にとにかく温かいものを食べさせてあげることが出来、喜んでもらえ良かった。容器は紙皿、紙コップ、割ばしで提供した。膳の上にのせてあげ1人分ずつで良かったと思う。こんな時だからこそ、衛生面には特に気をつけ、食中毒を出さない様、事故がない様いつも以上に気をつけた。大切に使っている水も不便で少なかったが、洗い水用に自衛隊さんの給水を受けることが出来、とても親切に対応して下さり助かった。

メフォスさんにも遠いところから応援にかけつけて頂き、買い出しに走って下さりいろいろな事を手伝ってもらった。

昼食には、今度はパック膳にし、名前をつけて患者さんのところまで時間通りに渡すことができたが、大半の患者さんが転院されており、この連絡がなかなかできる状態ではなかったことが何かとても残念だった。そして夜までに全員転院されることがわかり、夕食準備もしていた為、力が抜けた。しかし、役目をきちんと果たし色々な人の助けで食事作りもスムーズに出来、患者さんにも職員にも1人として事故がなく過ごせたことが不幸中の幸いだった。そして新病院が出来上がっていたおかげで変わらない様仕事が出来たことがこの上ない幸せだと思う。これからも心新たにして、患者さんに喜んでもらえる食事づくり、指導に頑張っていこうと思っている。

この鳥取県西部地震の体験を元にし、災害対策の記録を綴っておこうと思う。

地震など無縁のものと思っていた

メフォス調理師　長谷川 弘 子

数年前の神戸の地震は、他人事の様に思いつつニュースを聞いていたにすぎなかった。地震などこの日野町には無縁の様な気持ちで日々を暮らしていた。しかし、今回この様な地震をまのあたりに体験した今、ふり返ってみると、職場でも、家庭でも避難場所というものを確認していなかったと気付く。

当日はいつものごとく、午後1時すぎ各自弁当持参し、休憩室に集まり午前中の反省やら、午後の献立の事やら語りあいながら食事をとっていた。

突然、ゴォ～　ガタガタガタガタガタ　ゴォ～　ガタガタガタ…向い側にいた仲間の顔がまるでマンガに出てくるイラストの様に、顔がいくつも横に並んでぶれてみえた。この時の仲間の顔が忘れられない。

“地震だ”知らないうちにテーブルを囲み、仲間同士でスクラムをくむ様に小さく身をすくめていた。つけ物石がころぶ。ガラスは割れ落ちる。お鍋もゴロンゴロン。しっかり設置されているはずのシンクやガス台さえもが斜めにゆがみ信じられない姿であった。

誰となく火の確認をする者、ガス栓のチェックにまわる者、水道チェックする者と、以外と冷静に進んで点検が出来た。今回火災を出さなかった事が一番の安心だった。

窓の外では板井原川の水がすぐさまどろ水となり、すさまじい自然の恐ろしさを感じさせられた。地下の方からは何度もゴォ～と大山でも噴火したかのごとくうねり声をあげていた。給食室の横道の堤防の道は地割れがしビリビリと亀裂が入った。

少し冷静さをとりもどした頃、メフォスのメンバーはとりあえず裏庭に出てみたが、まわりには誰一人現れない。皆で日野病院の玄関に出てみた。患者さん達はこちらに避難していた。看護の仕方も接し方も不馴れである我々だけれど、患者さんのそばにいて毛布をかけてあげたり、社会体育館に物を運んだり…色々出来る限り患者さんの為にと思い手伝った。

▲日野町内崖崩れ
横を救助に向かう消防車が走る

…3時すぎ、避難の移動にばかり気をとられ食事を考える余裕がなくなっていた。これから先、ガスが止まったり、水も使えず、交通も止まり…と我々にどんな展開が起こるかわからない。手分けして根雨の街に非常食を買いに歩きまわった。病院にたどりついてホッとしたら、もう陽も落ちかけたいた。

いつ来るかわからない地震なので厨房の中では夕食は作らず、色々手段を練る。ありがたくJA職員さんがすぐガスボンベを持って来て調理の出来る様ガスも設置して下さった。これは本当に有難たかった。地元の助け合いが身にしみた。一つのコンロで、皆の手、皆の頭で何とか夕食が患者さんに出せてホッとした。

外でJAに借りたコンロ一つをうまく使いおじやを炊いて、簡単なおかずもつくる。お粥なべとおかずをさげて社会体育館まで行く。しかし病院側との連絡がつかず患者の様子が分からない。おおよその目分量で数を作って持って行った。様々な患者にあう食事を作るということも簡単ではない。物をとりに通ったり何度も水をくみに入ったりした。

お給仕に行ってみると、不安そうな顔で患者さんがじっと見つめていた。大変な事だけど、この食事で体を温めて、元気を取り戻してほしいと願った。その日の夕食は提供できたが明朝を何とかしなくては！夜中遅くまで朝食コンロの設置と、用意をし職員は別れた。

朝食の不安もあり、栄養士と共にその夜給食休憩室に泊まった。一度も家の様子をみていないので、娘が米子の高校からどうやって帰ったのか、家の状況はどうなのか、不安で余震と共に眠れぬ夜が続いた。その夜泊ったおかげで、朝食も無事出すことができた。

給食室の調理コンロの天井から水漏れ発生！！やむなく断水をされてしまった。ガスは室内で使えても水がだめ、バケツの水くみ作業では調理が進まない。消毒を充分にしてから食事を提供して来たのに、断水のバケツリレーにはまいった。そして、一週間位は避難所生活で患者さんも気の毒と思っていたけれど2～3日で非常食も出すこともなくなり、すばやい転院作業に目をまるくした。10月31日まで断水のままで、職員食を提供することとなった。

朝食はまだ薄暗い6時30分前に出勤し、余震と断水の中、一人厨房に立ち職員分4～5食の朝食を作る。余震のたびにガスを止め、ビクビクしていた。

あんなこんな心の動きはあっても、職員食をつくったあの短い期間、充実していた。おかわりはおいしい印、元気を分けてあげる印、よろこんで頂けた印、中には礼儀正しく、いただきます・ごちそうさまと必ず声をかけて下さった人がいた。何倍も何倍も嬉しかった。頑張ろうと思う気持ちを出させて頂いた。楽しかった。自分の思ったアレンジメントで、おいしそうに、味つけも、飾りつけも工夫して楽しかった。やはり働きたい。調理がしたい。新しいビルが健在であった事に感謝します。そして又再び、患者さんにふれられて幸せです。

▲ボランティアによる一般市民への炊き出しの様子

自分のもどかしさを感じながら…

薬局長　木 川 藤 子

平成12年10月6日、半分のスタッフで昼休憩の外来当番をしていた時だった。今まで経験したことのない揺れ、それとともに一斉に停電となり、物が倒れてくる危険をとっさに感じ、丈夫そうな物の陰に避難するように声を掛け合う。ひとしきり大きな揺れがおさまり、薬局の中は、水剤の棚から転がり落ちた薬品、調剤台から落ちた粉薬、ガラス容器の破片、外用剤パップ類（普段投薬しやすいように積み重ねていた）の海。それを横目で見ながらとりあえず外の駐車場に出、老朽化した病院の建物を眺める。

出てからも揺れが何度か続くが、状況がやっと把握でき、再び建物の中に入り、患者の避難活動をする。避難活動においては、薬剤師の出来ることは体力の提供。患者の避難方法の選択は、直接にはその病棟の看護婦の指示にて行動。こと患者に関して、直接役に立つ看護婦の行動に比べ、自分のもどかしさを感じながら人手の要るところで体力を提供する。電話線が混み使えない、にもかかわらず取材電話は鳴りっぱなし、おまけに空からは取材ヘリコプターの操縦音がかなりの騒音、道路は陥没した箇所が…。

やがてやっと通じたと血液センターより、必要時には直通電話番号を利用するようにとの連絡が入る。そんな状況の中、各個人の判断にて、それぞれに行動していたが、電源の切れた薬用冷蔵庫には、製氷機より調達した氷が入れられ、温度管理がされていた。50mほど離れた社会体育館に患者を移し、やがて来るであろう外来患者用のテントが駐車場に準備されると、救急薬（補液・抗生物質・鎮痛剤・止血剤・消毒薬etc.）を取りそろえに走る薬局スタッフ、それと共に、麻薬金庫の中・向精神薬の確認をする。とりあえず異常なし。病棟の方へも連絡、確認。鍵の保管。入院診療再開は、無理との決断が下される。医師は、この目の内にすべての入院患者を他院へ転院させる手続き（受け入れ先のみ空欄）完了、まさに徹夜状態に及んだ。この夜、泊まり込むことになったスタッフ2名で、一部ではあったが患者ごとの注射のセットを渡し作業を懐中電灯を照らしながらする。薬局の注射薬は、棚の手前においてあったものが、落下し、破損するも、アンプルシートに入っていたり、箱ごとの管理であったものは、破損は少なかった。内服薬の調剤はこの夜はなかった。（病棟より患者の持ち物と一緒に持ち出してあったのではないかと思う）

翌7日、薬局に入り片づけをした。薬品問屋関係より被害状況の問い合わせ電話をもらい、ダンボール箱と古新聞をできるだけたくさん集めてもらうようお願いする。これも片づけに大変役にたった。

▲車椅子など物品の援助を受ける

新病院へ移るまで

リハビリ室　生田伸二

1）地震直後から患者を駐車場へ運び出すまで

13時30分頃、リハビリ室は午後の入院患者の訓練を行っている最中であった。1名代休、1名出張中であったため、5名のスタッフと約10名の患者がリハビリ室に居たと思われる。

最初、ゆっくり小さな横揺れですぐ収まると思われた直後、突然大きな横揺れに変わり、壁が一部崩れ落ちた。揺れが止まり、案の定停電となった。

患者さんは全員無事であった。先ず、機器のコンセントを全て抜いたあと、事務室に今後の対応について確認に行ったところ、「患者全員を屋外に避難させる」ということだったため、リハビリ室にいた患者を屋外へ全員避難させたのち、他部門の職員と一緒に病院内の入院患者を1、2、3階の順に運び出した。定かではないが、地震直後より避難を開始し、終了するまでに30分も経過していなかったと思われる。

2）その後の対応（1～2日）

地震当日の夜は病院にて泊まるも余震が続き、いつ壊れるともしれない建物の中では眠れるはずもなかった。

翌日より、リハビリ室で崩れた壁などを掃除し、新病院移転に必要な機器及び書類と不必要なものとを仕分けした。

3）新病院へ移るまで

新病院に必要なものをダンボールに詰め終わると、箱詰めがまだ終了してない部所のフォローにまわった。

全ての箱詰めが終了したのち、新病院へ移送し、11月1日のオープンに向けリハビリ機器、ベッド設置などの準備を急いだ。1日のオープンには平常通りのリハビリを外来患者さんに施行できた。

4）当時を振り返って思うこと

地震が起こった時刻が夜間でなく昼間だったことや、天候が良かったことで速やかに患者さんの避難ができたと思われるが、これが夜中だったらと思うと恐ろしくなる。

地震後約1カ月の間、訪問リハビリ以外は片付けと移転作業を続ける毎日であり、リハビリという「仕事」ができる喜びを改めて実感した。当たり前のことだが、その時々を、一人一人の患者さんを本当に大事にしながら仕事をしていかなければならないことを肝に命じ、この貴重な経験を今後に活かしていかなければと思う。

▲震災後、意気消沈することなく新しい病院へと引っ越す

突然襲った震度6

総務課　頭 本 保 人

1．1時30分すぎから患者さんを駐車場へ運び出すまで

最初揺れたときはそれほどにも無いように思えたが、突然襲った震度6強の揺れにより停電し、また棚の上の物は崩れ落ち、事務室は騒然となった。なおも余震が絶え間なく続いているなか、誰となく「患者さんを運び出せ」との声。どこが震源地だろうと思いながら病棟へ向かった。渡り廊下付近で1階の看護婦が患者さんを運んでいるのと遭遇した。3階にあがると、患者さんをベッドの下へ避難させていた。看護婦の対応の早さにはびっくりした。「とにかく外へ運び出せ」との命令に重症患者さんは毛布に、徒歩可能な方はロープでの誘導、また車椅子での避難とエレベーターが使えない中でそれぞれの方法で玄関まで患者さんを避難させた。外には生々しい防災日野町の無線の声が鳴り響いていた。

2．その後の対応

玄関前に全職員と全患者が集まったわけだが、酸素の必要な患者さんには小型酸素ボンベで対応出来た。しかし自家発電が出来ない状況の中電気が必要な患者さんをどうするかの対応にせまられた。「保育所の電気がついてるぞ」誰かの声に「保育所へ移せ」の声。保育所の承諾を得て患者さんを移送させた。数名の患者さんに看護婦がついた。他の患者さんは社会体育館へ移送させた。余震覚めやらぬなか社会体育館はさながら野戦病院と化した。私はというと当日出張で不在だった院長先生を松本正弘さんと岡山まで迎えに行ったわけだが、岡山で会った院長先生の予想外の余裕の表情にはびっくりし、暗い気持ちだった私の気持ちも楽になった。そして翌日、患者さんの転医にあたり受入先の確保、救急隊との連絡そして家族との連絡等に追われた。その後、患者さん全員が無事体育館を脱出することが出来、ひとまず胸をなでおろした。

3．新病院へ移るまで

その間病院は立ち入り禁止の赤紙が貼られ診療が出来ない状態となった。患者さんを送った後、診療を何とか始めようという思いで、旧看護婦寮を改造し仮診療所にし、表の駐車場にテント、仮設トイレを設置し診療を開始した。また、訪問部隊は日野町の各避難所へ向かう。日南病院に向かう看護婦、荷物の整理運搬する職員、そして新病院の立ち上げの為に新病院に部屋を設置し日々物品購入に関する仕事に追われる移転準備室のメンバー。各人がそれぞれの担当を持ち移転に向け精一杯努力した3週間だったと思う。また、忘れてならないのが、この震災に親身になって医療備品の援助にたずさわって頂いた広島国際大学の谷田助教授をはじめ多数の方に身に余る励まし、お見舞をいただいたことを本当に感謝したいと思う。

▲旧看護婦寮の仮診療所

10月6日を振り返って

事務局長　川 上 和 彦

今当時を振り返ってみますと、当日10月6日午後1時30分、病院事務室でパソコンに向かっていましたが、それはそれは凄い揺れで、僅か15秒ほどでしたが、横揺れで4～50センチは動いたように思います。机の上、戸棚、書庫等事務所の中は、足の踏み場のないほどで想像に絶する惨状でした。事務所の職員は机の下に隠れる者、カルテ棚が倒れると言って手で支える者、戸外に避難する者、私の事務机の上を土足で飛びあがって走って戸外に避難する者等々、あきれた感で見ていましたがふっと我に返り、「自らが避難するとは何事か、直ぐに病棟に飛ぶように」と一喝いれて病棟に飛んで行きました。

途中、廊下には車椅子、ストレッチャー、回診車等散乱し、また、防火用の扉が閉った状態にあり、つぶれないための予防処置に閉めたのか、とも一瞬考えたりもしたりしました。もちろん、エレベーターは扉が変形して動きません。そんな状況の中、詰所に看護婦さんの影はなくみんな病室に駆けつけていました。廊下では点滴のまま吊台を持つ者、布団に包んで下げる者、ストレッチャーを押す者、一方では男子職員は背負って出る者、担架で運ぶ者、車椅子の人など職員の機敏な行動と状況判断で5～6分ほどで1階の患者さんは玄関前の駐車場に避難を終えていました。その様な職員の冷静な判断で3階までの入院患者さん74名を全員無事に事故もなく避難できたのは、細心の注意を払いながらの医師、看護婦さんの指示のもと、統率とれた行動のおかげと其の点感謝しております。

地震発生から患者さん全員の避難まで、その間約20分ほどでしたが、事故もなく短時間のうちに避難できたものと、我ながら驚いています。

当日は、堀江病院長は岡山市へ枝原総婦長は米子市へ出張中で不在のため、岡野副病院長が日野病院地震災害対策本部長で対策本部を避難場所の駐車場の一角に立上げするとともに、仮設の救護処置室を設けて救急患者の手当てもできる体制を整えると同時に、やけど、けが、骨折、生き埋めの方等、次々と患者も搬送されてきます。入院患者のフォローとともに、外来患者の手当等大変な状況でした。

一方で病院周辺は水道電気が止まり、まともに治療もできない状況から、とくにお年寄りで吸引器が必要な方が7人ほどおられたことから、当日5時頃までに日南病院にお願いして、搬送させていただきました。残り67人は病院の高架水槽が壊れ擁壁落下の恐れもあり、電気水道が駄目なことから患者を病棟に返すことはできない、と判断し近くの社会体育館に全員避難して一夜の診療体制整えました。

当日は地震発生と同時に、非番の職員に非常招集をかけて職員全員が非常事態に対処しました。体育館に避難後落ち着いた段階の夜10時頃から内科、外科、整形外科等主治医毎に、米子市内の病院と連絡をとり搬送受け入れ可能人員の掌握に努めるなか、翌朝までには搬送先病院、施設、自宅搬送者等確認ができました。一方、夜8時半頃には自衛隊の救援隊も到着していただき、飲料水の確保、仮設トイレの設置もでき、また、日赤鳥取県本部からは、毛布の支給もうけました。

ここで特筆しておかなければならないのは、スーツを着た好青年が一生懸命我々に協力して、患者さんの般出に最後まで協力してくれたことです。私から「大変お世話になりました、お見舞に来られた方ですか」とお尋ねすると「日本加除出版の職員で広島から来ました」とのお答えでした。「情報によると国道は各地で不通です。帰られるのがたいへんですよ」と言うと「何とか帰れるでしょう」と言って帰って行かれました。あの時の感謝の気持ちとありがたさは、今でも忘れることができません。ありがとうございました。

冷静なスタッフたち

事務主査　遠 藤 隆 則

平成12年10月6日（金）午後1時30分頃、そのとき私は11月18日に予定されていた新しい病院の竣工式招待者リストのチェックをしていた。突然、グラグラグラッと、今までに経験したことのない物凄い揺れを感じた。同時に、パシッという音とともに停電になった。

一瞬、何が起きたのか判らなかった。「地震だ！」事務室に居合わせた職員の殆どが叫んだ。私はとっさに自分の席を立ち隣の事務室に飛び込んだ。「動くと危ない！」瞬間頭をよぎったのは、阪神・淡路大震災の悲惨な凄まじい光景であった。と同時に保育園児や小学生達が避難訓練で机の下にもぐる姿であった。そこで私は目の前の総務課長の机の下にもぐり込んだ。即刻「遠藤さん！そこは危ない！棚が倒れる！」総務課長の声が響いた。「危ない！」すぐ飛び出し、ツッカケのまま隣の机の上に飛び乗り、窓を開けてやっとの思いで外に脱出した。恐怖におののいていたため、自分の安全ばかり考え、入院患者さんの救出など全く頭になかった。

玄関に目をやると、看護婦さんを始め大勢の職員が患者さんを引率して出て来た。ふと我に返り玄関と避難場所である駐車場を何回も何回も往復して患者さんを避難させた。ここで特筆しておきたいのは、歩行可能な患者さん達数名ずつがロープを固く握りしめながら、整然と一列になって出て来られたときの姿であった。「凄い！日野病院には冷静な素晴らし看護婦さん達がたくさんおられる」私は判断力と統率力の凄さに目頭が熱くなるのを覚えた。全員が無事避難するまでの時間は案外短かった。エレベーターが使えなかったため、2階や3階からの救出は、敷布団ごと或いは点滴をつけたままの救出であり、大変な神経を使うとともにもの凄い労力を要する作業であり、あらためて非常時における人間の強さに驚いた。年齢層の高い74名の入院患者さん全員をかすり傷一つ負わせることなく無事救出できことは正に奇蹟的であった。暫くして机一つ、椅子一つの震災本部を設営し、副病院長に座ってもらった。それは情報の把握を一本化するためであった。その後不安な眼差しで私達をジッと見ておられる患者さん一人ひとりに、「気分はどうですか？」「もう大文夫ですよ」と、いたわりと励ましの言葉をかけて回った。

「停電のため吸引ができない。どこか発電機はありませんか！」看護婦さんが血相を変えて走って来た。誰かが叫んだ。「保育園に電気がついている！」直ちに吸引の必要な患者さん数名をストレッチャーごと保育園の庭に運んだ。ひとまず安心した。そのうち内科、外科、整形外科の各医師が、他の医療機関へ転院させるための折衝を始めた。転院が決定した患者さんから順次、消防署の救急車の協力を得て比較的スムーズに転院が完了した。そして転院を必要としない患者さんを隣接の日野町社会体育館に移した。上空では物凄い騒音の数機のヘリコプターが飛来し始めた。電話が鳴っても相手の話し声も聞こえない。あの阪神・淡路大震災のときガレキの下に埋もれた多くの人が精一杯の声で助けを求めたとき、騒音のため声が届かず尊い命を失った教訓が生かされていない。

夕暮れが近づいてきた。少し空模様もおかしい。雨が心配だった。私はテントによる仮診察室を設置するこを考えた。役場から借りようと電話するも話がはかどらない。止む無く知り合いの工務店から借りることにして猛スピードで自転車を走らせた。店主は快く貸してくれた。私の親戚の者が従業員でいたので彼に運搬を頼んだ。本当にありがたかった。知人の親切心が本当に嬉しかった。

一晩中余震が続いた。ドドドドッと山なりがする度必ず余震がきた。とうとう一睡もできないまま朝を迎えた。私の部屋の外には地震がきても事務室からすぐ逃げ出せるように置いていた、折りたたみ椅子が主である私を待っていた。